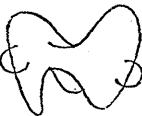


幼年期について



勝 部 真 長

はじめに

私自身の幼年期を思い出してみても、小学校に来ている子どもを見ていましても、どうも幼年期というものが、私にはわからぬのです。

一、テレビの子どもに与える影響

現在テレビがこのように発達しまして、長い時間テレビを見る集中力はないが、断片的にテレビを見ていることからくる影響が今の子どもに現われていると思います。特に最近の子どもたちの中で、それはまずことばに反映しています。意外なことばを知っているということです。ボキャブラリーが豊富です。しかしそれはまだあまりのあるボキャブラリーでなくでたらめな豊富さです。

ことばというものがテレビの持つている映像文化のイメージと結びついているので、場面としては幼児も何となくわかるのではないかと観察していく考えられます。

たとえば、小さい子が「あ、かがでんらくした」と言います。

転落なんてことばをどうして知っているのかと思うと、もっぱらテレビの中で落ちてくるところを転落と言っているのを覚えたようですね。「裏切られた」などということを裏切りという形で理解しているとしますが、それは裏切りということを場面として理解しているという形です。子どもの中にかなり情緒というものがモザイクのように無秩序な形ではいりこんでいます。いろいろな情緒が子どもの中に吸収されつつあるということが、いわゆる情報革命と言われるテレビの時代に育った子どもの、ひとつの特徴のように現れているのではないかと思います。

二、幼年期の長さが持つ意味

しかし、これよりも、いつも言われることですが、人間において幼年期が長いということの方が問題であります。ということは、生まれてすぐには何の役にもたたないきわめて無力な、そして保護を必要とする存在であるという事実です。動物はほとんど生まれてすぐ自分で用がたせます。犬や猫でも半日か、二、三日もすれば自分で動き、えさを探すことも可能です。フライキヤッチャードという鳥は、生まれるとすぐ目の前のはえをつかまえて食べると言います。生まれてすぐ自分でえさをつかまえる能力を持っているということに比べると、サルとか人間の子どもは何にもなりません。この使い物にならない赤ん坊、しかも一番てまひまがからなければものにならないというのは、何を意味するか、というのがここで第一の問題です。

人間の子はおかあさんのおなかの中から出てきた時は未完成で機械にたとえるとまだ半分しか組み立てができていない製品です。そして出てきてからまだてまひまかけて組み立てないと動きださない、というはんぱな状態で生まれてきます。他の動物はほとんど完成品として出てきて動き出す、というのに比べて人間の子はほんぱ製品であるというのは、きわめて複雑なしくみだからだと説明ができます。人間の体や心はてまひまかけなければ自動

的に動けない複雑きわまりないものであり、何がそんなに複雑なのかなどと結局心だと思います。心というのは医学的に申しますと、脳と神経組織から成り立っていて、その成熟にてまがかかるのです。脳と神経組織の調節ができるまでの保護が必要なので

子どもが歩こうとする時、物を言おうとする時、何かを覚えようとする時のエネルギーの集中は大変なものです。

脳と神経組織が複雑なのでそれを十分なものに整えるまでに変な期間を必要とします。ところがこの準備期間（幼年期）が長いということが、実は人間社会の基本的なあり方を決定しているのではないかでしょうか。母が目を離せないということが起こります。犬や猫は親がすぐ目をはなせます。ですから、動物の世界では、子どもがどこかにまぎれて自分の子どもであることがわからなくなるぐらいに大きくなって、どこかで一人前の成犬、成猫となって生活し、親と子の近親相姦の関係もおこなわれます。

三、人間固有の家族形態と幼年期

人間の場合でも、もし、子どもがはやく一人前になつて、親の手もとを離れてどこかに行つてしまつたとしたら、人間の生活のあり方はよほど変わっていたと思います。まず家族というものがあつたかなかつたかわからなくなり、それはちょうど動物の世

界に家族があるかないかわからないのと同じですね。人間が嘗んでいるようなはつきりした形の family—家族生活—というものは、子どもが一人前になるまでにきわめてまひまがかかるということがあるから起こったのではないかと思います。子どもが、もし、すぐ手を離せる、親のそれほどの保護を必要としないといふことがわかれれば、夫婦というものがこれほど固く結びついていふことが可能かどうか。おそらく子どもを育てるのに十年、二十年必要だということから夫婦は長くいっしょにいますし、いっしょにいれば当然そこに親密な結びつきというものがあつて、離れるがなくなるという今の家族の構成というものが気持の上ででてくると思うのです。しかし、子どもに対する責任がなくなればかなり男女は自由になり解放されると考えられませんか。

子どもへの責任というものを抜きにして考えた場合には、今よりももっと離婚というものが起こりうるでしょうし、男女はかなり解放されて自由に新しい生活をきりひらくチャンスがでてくるのではないでしょうか。ということは、そもそも家族というものが今あるような形で固定したものではなくなると思うからです。

今のように家族が固定した永続的なものとしてあるのは、やはり子どもの長期にわたっての養育というものが中心にあるからだと思います。子どもがいつまでも手がかかる、それをかかえていなければならないということから、実は親子の感情がきわめて

深いものになり、そこから人間関係というものが深みをおびてくるということが起こつてきているのではないでしょうか。だから出発点から子どもが動物と同じようにはやく一人前になつてどこかに行ってしまうという前提にたつて考えると、社会の構造ががらりと変わってしまうのではないか、と私は想像します。こういうふうに現在の家族というものがつくられる前提には、幼年期の長さ、子どもがいつまでもまひまがかかるということがあり、そこからひとつの人間らしい道徳性が生まれてきます。親子の中には切つても切れない深い感情が生まれてくるのです。

実際夫婦はいつまでも他人だが、子どもが生まれるとその子どもを媒介にして親類になります。おまえは子どもの母親であり自分は子どもの父親である。したがつて父と母という関係において親類なのです。血のつながりはぜんぜんないのですから、つながりがあるとすれば子どもの中に父の血と母の血がまじっているという関係で、子どもから逆に規定されて、切つても切れない血縁というものが出てきます。まったく子どもがなければ夫婦は赤の他人、平行線ということです。しかもその子どもが血縁だけならば動物の世界を考えてみるとたいしたことはないが、そこに家族生活という感情的なものがプラスされることによって、われわれは根本的にちがつたものとつくりかえられてしまいます。そして、その根本は愛と憎しみの感情だと思います。

四、心情のできあがる過程

非常に小さい時から子どもは愛と憎しみがわかるようになっているのではないかと思います。

① 快・不快の原理

子どもを観察してみると最初にあるのはいうまでもなく快、不快の感覚です。たとえば皮膚が非常に気持ちいい、くすぐった

い、首すじなど特にすぐったくてキャーキャー言つて叫びますが、ああいう快、不快の感覚は実際に敏感に全身にばらまかれているのだと思います。

その快、不快の感覚で子どもは行動しています。快なるものを求め、不快なものはさける。これは子どもに限らずおとなにも共通な行動のようどころとなっていますが、ただおとなは目前の不

快はがまんしても承認の快楽を求めます。

たとえば歯が痛い時、歯医者にいってガリガリやられるのは不愉快でありますが、虫歯をいつまでもほっておくというのは良くないことがわかつていませんから、一時の不愉快はがまんしても承認的な安心、快楽を求めるというのがおとなの大快楽計算であります。それが子どもの時はのみこめないので騒ぐのですが、次第に子どもも快なるものを求める時に親なりまわりのものがしつけをするわけです。良いこと

をすればいい気持にさせ、悪いことをすればおしりをたたく。良いことをすればほめてもらえる、おかしをもらえるというように良いことと快楽とが結びつき、悪いことと不快なこと、痛いことが結びつき、快、不快の原理が同時に賞罰の原理、それをほめられるることとしかられること、つまり人の社会において認められることが認められないことに分かれてくるということが幼児期に感覚を通してわかってくるのです。

これがしつけの第一段階だと思いますが、この快、不快の原理で最も動いている時に、そこに善惡の原理というものが子ども心に結びついてくるということが人間が人間になる第一段階だと思います。最近このところで手をぬく親が多いようです。はつきりと感覚を通して良いことと悪いことをしつけておくということに手をぬいてしまう、漠然としかやっていない親が多いのではないかでしょうか。

その証拠に中学生が高校生ぐらいになって悪いこと、いわゆる非行をして、調べてみると良い悪いの区別がわかつていない青少年が多いのです。たとえば線路に何か物をおいて電車が来てぶつかるのを見ている。電車が事故をおこすのが、急停車するのがおもしろくてしかたがないと見ている。ただおもしろいから、痛快だから、つまり快、不快の原則が子どもの時のまま残つていて、そこに善惡の原理がはっきり結びついていない青少年が

非常にふえてきています。善惡の判断がきわめてあいまいでぼやけている、ということは、どうも幼児の段階で親たちが良い悪いのけじめをはつきりさせていなかつたとしか考えられないのですが、いずれにせよ幼児期の特色が快、不快の原理で動くということは、その後の成長に非常に影響を及ぼすと思います。

② 情緒から心情へ

第一に情緒(emotion)であります、特に情緒と心情を区別して考へると幼年期の意味がはつきりすると思ひます。情緒といふのは一時的な心の経験、つまり怒るとか喜ぶとか笑うとか、その場その場の心の動きが情緒であります。その時の気分です。これに対し心情(sentiment)は永続性のある長続きのする心の状態をいいます。それは愛情とか憎しみとか嫌悪とか好きとか：趣味も心情につながっているのだと思ひます。非常に深い、その人のpersonality—人柄—というものにかなり中心的な要素が心情といわれるものであり、同時にその人の趣味となるところの基本的なものだらうと思ひます。

しかしほんとうのおとないうのはそろはいかないので、心に深いところがあります。つまり淵というか、川の曲がり角で深いところがあるのであります。水の面は鏡のように静かで波ひとつたつてないのに、奥にくと深く流れいてその渦に足をとられるときおぼれて死んでしまう、というところがよく長瀬とか、川の流れ

と流れてる状態が情緒だと思います。浅いところでビチャビチャ波だって年中流れている。今泣いたカラスがもう笑っている、と申しますが、子どもは泣いても「さ、もう泣くなやめて」とおかしをだすとピタッとやむ。目に涙をためながらおかしを握って笑い顔になつていて、というふうに心が浅いのです。浅瀬で波だつているから絶えずビチャビチャしているけれども、泣いたと思つたら笑う、笑つたと思ったら怒る、というように絶えず流動的です。こだわっていない、流れている。その点子どもは無邪氣といわれます。おとなでもいますね。実に無邪氣で、今泣いたと思うともう笑う。このあいだまでおこつていて人にブンブンしてもどうぞこれひとつ、とつけとどけるとにこにこして手のひらをかえしたようす態度がわかる、というきわめて單純なかわいい女といわれる人がいます。それは心が浅瀬で、こだわるところがなくきわめてつきあいやすいわけです。

③ 愛と憎しみの感情

の途中にあります。つまり表面はしーんとして何ら変化を示しませんが、心の奥深くに渦をまいてる。愛の渦、憎しみの渦、これは深いものです。ですからだとえば親の愛情というものが、子どもがいろいろな悪態を申しましてもあまり問題にしないのは、心の奥深くで愛しているのです。表面的に波だつてバシャバシャ激しいやりとりをしましても心の奥では深く愛しているのです。

あるいは、男女の間でも深い愛情というのはそういうものですね。表面的にはあんなにぐられたり髪をひっぱられてもなんでおとなしくついているのだろう、なんてよけいなお世話で、本人どうしはもっと深いものでつながっていて他人にはわからないものです。夫婦げんかは大もくわないので、そこのところなのです。そのかわり、表面知らん顔をしていても憎しみを持つている人がいますね。深い憎しみをたたえていて表面的には顔にだしていませんけど、心の底では嫌い憎んでいるという人がいます。その深い底に定着したのが、その人の personality の一番大事なものであって、そしてそれは趣味につながっていると思します。

特に女性は、いやなものは着ないでじょうから、着ている以上はやはりその人の趣味だと思うのですね。だからこう見わたして、「ははあ欲求不満が相当強いな」「そうとうやきもちやきだな」とかいうことを全身で表わして歩いているのだと思います。そこでユニホームというものはそういうものを出さないで、無難な色に変えて内面をおしつつむとということになるわけです。そういうふうに心情というものができあがるまでが、幼児期というものが形成過程として、少年少女期、あるいは青年期にかけてその人の人格の土台の時期ではないかと考えます。

④ 趣味

趣味を聞くということは、たとえば入学試験とか就職試験なんかに趣味を聞くのは非常に意味があります。なんでもないこと

五、心について

心というものは、さつきいましたように、脳と全身にはりめぐらされている神経組織（系統）の働きだと考えた方がいいだろうと思いますが、しかしわれわれは脳と神経組織だなんていったのではピンとこないで、むしろ心とか精神とかいった方が親しみやすいので心というのですが、その心を分解すると意識と無意識にわけることができます。

① 意識と無意識の領域

つまりわれわれがふつう心と言っている部分には、意識している部分と無意識の部分があると思います。意識は気がついている状態、無意識は気がつかない状態、たとえば夜眠っている時は無意識状態です。無我夢中ってやつです。この無意識の中でボカッと意識が水の中の油のように浮いているのが夢です。だから夢というのは意識なのです。けれども無意識の中にボカッと浮かんでいるものだから、朝目がさめると思い出そうとしても思い出せない。夢の続きを知りたいと思ってもなかなか続きがでてこないで苦しむのですが……。この夢はまた、その人の無意識が押し出したものですから何かその人の願い、願望というものがでてきているのだろうと思います。

しかし、夢を見ないで熟睡している時は無意識そのままです。

ところが朝起きると意識がよみがえってきます。みなさん、朝め

がさめて手を握りますね。きちつと力がはいって握れますか。つまり意識するほど握れるわけで、無意識状態の時は手がしつかりと握れないのです。朝めがさめた時に握力がちゃんとどつていれば意識のもどり方がはやい、健康だという証拠です。これがなかなか握れない。力がはらないというのは、やつぱり血のめぐりが悪いので無意識から意識の転換がおそいのです。

しかし意識がよみがえってくれば、「ああ、きょうは曇りか」「きょうはお茶大の講習会か、やれやれ」とかいうことを考えます。現在、私は意識してみなさんにお話ししていますし、みんなもおそらく意識して聞いていてくださるのだろうと思います。

中には無意識の方もいらっしゃるかも知れません。その私の意識の下に無意識の部分がずっとひろがっているのです。ちょうど三角形の氷山の一角ということができます。氷山というのは海面の中に三角形に浮いていて、そのほとんど八倍ぐらいが海面下に沈んでいます。船が氷山にぶつかるとこわいのは、この下の所にぐさっとささって動きがとれなくなるのです。人間の心も意識の部分というのは心のごく一部だといわれます。あと八倍ぐらいの深さで無意識の層がずっと沈んでいます。

② 意識行動と無意識行動

人間を行動にかりたてるのは、意識からくる部分と無意識か

らくる部分とがあります。われわれは意識してこうしようと思つてする行動があります。今みなさんがここにいらっしゃったのは、意識して、会費をはらつたのだから行かなければならぬ、といふお考までちゃんといらっしゃったのだと思ひますが、ところが

無意識でフラフラといく場合があります。停年で退職した人はさびしいらしいのですね。朝起きてなにげなくまた元勤めていた学校へのこのこやつてきた人があります。「あ、もう四月から自分は停年でやめたんだ」と、来てみてからあわててひきかえした、という話を聞きますが、それは条件反射みたいにくせになつていつも言えますが、無意識の中で、人間はやはりじつとしていらぬない、出ていって働きたい、という欲求があるのでしょうか。

あるいは恋をしている時に、無意識のうちにきょうは会う予定ではないのにフラフラと恋人のいる方向に電車をのりかえたりしているということがあるそうですが、とにかくわれわれは無意識の中で行動することがしばしばあります。実は意識して行動しているながら、それをささえてるのは無意識の行動であり、無意識の願望である、という場合もあります。

③ 自我感情の形成

この意識といふものの中心に実は自我感情があると思ひます。我というものが中心で意識といふものはまどまりがついていると

思うのですが、幼児期の特色はその自我感情がどういうふうに育つてくるかということにもあります。これは国によつて多少違うと思うのですが、日本の子どもの自我感情はどういうふうにして形成されるのでしょうか。

アメリカの社会学者でミードという人が書いた本に自我感情の形成過程があります。つまりアメリカの子どもでありますが、I私という感情は最初からはないというのです。むしろ最初にあるのは、me私に、とか私を、というふうに受身で自分を受けとつてゐる。僕をいじめたとか、僕に石ぶつけたとか、受身で自分を感じるのが最初にでてくる段階で、それからその次にmy私のという所有格で発想します。みち子ちゃんのお人形、より子ちゃんのおへべ、おくつ、なんていうふうに所有格ですね。常に自分のものを並べる、自分の物を集め、それは必要な段階でしそうけれど、そこに自分を投影する。

そしてみち子ちゃんのお人形とか、みち子ちゃんの絵本とかを見ているうちに、みち子ちゃんなるものがはじめて透視されてきます。そして、I私が、みち子ちゃんが、自分が、という自我感情が高まつてくるのです。つまり、自我意識の成熟ということ、これが人間形成において大事な問題であります。この自我感情が意識、無意識を通じていぢばんしめくくりになる中心の感情だと思います。つまり、子どもにとって大事なことは自我感情がゆが

められていない、ということです。

今、言いましたように、いつも受身的に自分がいじめられている、被害をこうむっているというような被害者意識、日本民族というのはかなりこの被害者意識が強いと思うのです。常に何か占領されているとか、あるいは敗けたことがひびいてるのでしないか、いまだに何かされているというような受身的発想しかできない時があります。もっと自主的に日本がこうするんだ、というふうに立ち直るといつも思います。非常に受身的なところはまた、児童心理が日本人には強いのではないかと思う節があります。それはそれとして自己を大切にする、自分を粗末にしない感

情が子どもの中に育ってき、ある意味の主体性、自主性というものが正しく育つことのくふうが常に施されていなければならないと思います。

④ 生と死の意識

特に子どもを見て、観察して感じられますのは、死、ということが何歳ごろからわかるか、ということですね。「パパなんか死んじまえばいいんだ」「ママも死んじゃえればいい、僕は家出するんだ」なんて勇ましく出ていくのがあります。良

くできる学生でしたが、非常に完璧なを作りたいと願っていたのですね。それで当然もう卒論として通るくらいのいいものを書いているくせに、まだ自分がそれが足りないと思って、骨身をけずつて大きなテーマをかかえて苦労し、最終提出日の前の晩に、もう間にあわない。そこで、ふらふらと自分の家を出て、中央線に飛びこんで死んだことがあります。そういう疲労困憊し、疲れきった時に人は死の誘惑に襲われるのですね。どこまで本

気で死がわかっているか、ということが私にも疑問なんんであります。幼児期における死の意識とか死についての感覚、これが知りたいと思います。

とにかく人間には生の本能と死の本能があります。つまり人間は誰でも生きたいと思う。殺すぞといわれば逃げようとする。これはもう本能的に人間が持っている生きようとする意識であります。けれども同時に死の本能がある。死にたいという気持は誰の心にあるはずなのです。それは健康な時にはありません。危険なのは疲れた時、心身ともに疲労困憊した時、くたくたになつた時です。

たとえば受験勉強で浪人を何年もして絶望的な状態にあり、毎晩徹夜の勉強で神経衰弱になつている受験生がふと思いついて死んでしまう。いつでしたか、お茶の水女子大学の歴史の四年生が卒業論文を持って中央線に飛びこんで死んだことがあります。良くできる学生でしたが、非常に完璧なものを作りたいと願っていたのですね。それで当然もう卒論として通るくらいのいいものを書いているくせに、まだ自分がそれが足りないと思って、骨身をけずつて大きなテーマをかかえて苦労し、最終提出日の前の晩に、もう間にあわない。そこで、ふらふらと自分の家を出て、中央線に飛びこんで死んだことがあります。そういう疲労困憊し、疲れきった時に人は死の誘惑に襲われるのですね。

中小企業の経営者が、年の暮れになりましてボーナスを出すこ

とができない、金ぐりがつかない。工場を閉鎖しなければならない。おおぜいの家族をかかえている。そういう時に金策にかけまわって夜も寝ないでそろばんをはじいてとびまわっているのに金ぐりがつかない。もう心身ともに疲労困憊している。そんな時省線のプラットホームに立って、雨がしょぼしょぼ降っていて、ゴーッと電車がはいってきますと、ふつとひきずりこまれるような気持で前に飛びこんでしまうのですね。だから町を走ってくるバスとか大型トラックのヘッドライトを避けることをしないで、ひきずりこまれるようひきこまれていくという感じがする、というのが疲れきった時の異常な感覚らしいです。それを日本では昔から死神にとりつかれる、といいます。

フロイトという精神分析者は、death-desire—死の願望—と申しましたが、人間は生きようとする願い、いつまでも生きたいという健康な願いと同時に、不健康な願いとして死にたい、いつも死んでしまった方が楽だという、死への誘惑というものを誰しもが潜在的に持っています。そこで自殺ということが常におこるのですね。日本は自殺の多い国です。スウェーデンも自殺が多いそうですし、イスラもかなりあるそうです。社会保障が進んで生活は困らないのに人間は死ぬことがあるのですね。それは気持の上で疲れた時、不健康ですけど、ノーマルでありませんけど、事実

において人は死にたがるのです。

日本で心中ということがありますね。親子心中、一家心中、あるいは男女の心中、この心中というのは、実にわけのわからないものでそれども、おそらくキリスト教の側からは無意味なことだと思います。つまり男女はたとえいっしょに死んだってあの世で結ばれるとは限らないのですが、仏教の考え方からするとこれは意味があるのでね。仏教では夫婦は二世といいます。親子は一世、夫婦は二世、主従は三世、つまり親子はこの世かぎりのつきあいですが、男女の仲はある世と別の世、another-lifeにおいても結ばれている、という二重の lifeにおいて縁が深いのです。主従—主人とけらい、あるいは先生と弟子—の仲は三世、三代にわたって、過去、現在、未来にわたって縁がつながっているというふうに解釈してきたのが、徳川時代の仏教の解釈です。ですから、元禄時代、近松門左衛門が戯曲を書いたころは、心中物がたくさん喜ばれて上演されました。この心中の考え方方はこの世でいつもになれない、仲を裂かれている男女は、二人でいっしょにはやく死ぬことによって、あの世に生まれ変わってこんどは天下晴れて夫婦になろう、という考え方なのですね。この考えにとりつかれていますから、死ぬことがむしろ喜ばしかったのでしょうか。

そういうふうに日本では男女は心中というものを考えていて、

それはひとつ慰め、この世の苦痛に対する慰めとなつてゐるのですが、死にたがる氣持というのは、人間の中に根づよくあるようです。

子どもでもすでに小学校の一、二年で自殺した例があります。

私自身も、たしか小学校の一年の時、首をくくった経験があります。あれどういうつもりで首をくくったかわからませんが、昔かやのつり手というのがあって、それに首をくくって台から飛びおりたことがあります。その時、つり手がくさりかけていて切れ、私は助かったのですが、あれがじょうぶであつたら死んでいたかもしれないのです。その後長い間首にすり傷が残つて、汗がしみると痛くて困つたことがあります。確かに私はその時死のうと思つたので、死に対する願望は幼児期にもあるのではないかと思います。

⑤ 向上と墮落

とにかく、生の本能と死の本能があり、これが日常生活で現われる時は向上心と墮落願望となつてあらわれます。つまり人間は生きている限りより良く生きよう、betterに生きようと思います

が、それが向上心です。常に良くなろうとする、実際にはそもそもいませんけれど、やはり年の暮れが近づくと日記を買ひこんできて来年は日記をつけようと思ひます。いざつけはじめると三月

頃から白紙になつて、もう六月ともなれば連続白紙でつけておりませんけど、それでもまた年の暮れがくると来年こそは、と思って日記を買ひこむというのはやはり向上心の現われだと思います。

その反面墮落願望というのがございまして、人間はやはり、落ちたい、墮落したいという誘惑にひきずられることがあります。もう十年ぐらい前の話ですが、幼稚園の先生をしていた方で、園長さんとけんかしたのですね。そのうちがまんがならないことがあって、どうしてもやめる、やめていつそ自分は傷だらけの女になつてみたい、だからバーにつとめたくてしようがない、と相談に来た人がありましたが、そしてとめても聞かずにつとうやめバーの女になつた人がいました。一変して墮落してみたのですね。そういう墮落への願望というものがあるらしいのです。中学生の女の子でも池袋あたりで話していますよ。「私、墮落しちゃおうかしら」「ズベ公になっちゃおうかしら」なんて。先生に叱られ、親にも叱られ、気持の上でもう行き場がないと、いつも墮落しようかという気持になるのです。

⑥ 建設と破壊

それは子どもにはないようですが、子どもに現われるのは破壊本能です。つまり、向上心というのは建設の本能、物を建設して

えること、これがどうやつたらできるか、ということです。

いきたい、より良く築きあげて行きたいという気持、ところが墮落本能というのは、反面では破壊本能、ぶちこわすことです。もうどうにでもなれ、といなおつて、めちゃくちやにしたいという

破壊が外に向かえば、今の全学連のように物をたたきこわすわけです。自分に向かって破壊すれば、傷だらけの女性になつてみたとか自殺したいとか自己破壊になるのです。原理はひとつです。外を破壊するか内を破壊するか、外を破壊すれば社会に対して攻撃的になります。

この破壊本能が幼児には強いと思われます。子どもを観察していますと、建設よりも破壊です。よちよち歩いて来て、夕方こしらえたちやぶ台のお膳をカシャカシャと丹念にこわして満足している。あるいは積み木を積むと、まずこわすことですね。夏になつてトンボとかセミに糸をつけて持つていてやると、すぐに羽を破つちゃうのです。實に残虐性にとんでいるのが人間の子どもだろうと思います。この残虐性があるということを知つておいて、そうしてはいけないということを教えてあげなければいけないと思います。万年筆はたたきつぶす、時計をみれば放り投げる、それを万年筆はこうやって書くもの、時計はこうやって見るもの、と教えなくては、教育によらなくては、建設がわからないのです。子どもはほうつておけば破壊的です。ですから幼児期において、破壊ではなく建設を教えること、憎しみではなく愛を教

今的学生を見ていると、破壊本能だけが発達しているのです。建設はありません。ともかくこわすこと、破壊のための破壊です。何でもこわせばいいと思つてゐるらしい。それは非常に憎しみにあふれています。政府自民党が憎い、学校が憎い、学長が憎い、教授が憎い、権力はすべて憎い、立命館大学の庭にあるわだつみの像も憎い、みんな憎い、だからこわす。これはもう破壊と憎しみの本能だけでつき動かされているとしか思えません。

しかし、憎しみというものは強いものですし、これは必ず破壊につながるものなのです。

北風の物語がありますね。旅人が外套を着て行くのを北風と太陽どちらが先に脱がすことができるか、という話です。はじめに北風がぴゅうぴゅう寒い風を送つても、旅人はますます外套をかたく着て脱がなかつた。太陽がにこにこ笑い出すとさすがの旅人も暑いので外套を脱いだ、という子どものお話は、この愛と憎しみの戦いを端的に表わしています。結局憎しみはいかに強くて人の心を動かさない、やはり愛情が人の心を動かすのです。

今の学生運動はどうしてこの原理がわからないのかと思います。憎しみと破壊の連続の中でどうして人が感激し、心を奮いた

たせることができるのでしょうか。よほど幼年期に何かが欠けていたのではないかという気がします。よほど母親がほうつておいたか、ついてはいたけれども別のところに力をいたか、ひとつ

考えられることは、幼児期にあまりに母親が（父親でもいいのですが）子どもに手を加えすぎ、子どもがほんとうにしたいことをさせてあげなかつた場合、子どもがほんとうにしたい遊びはさせずに、子どもがほんとうは嫌なこと、ピアノとかバレーとかそういうレッスンとかあるいは勉強とかを強制してきた場合、子どもの中には深い憎しみが母親に対して植えつけられる、ということは

考えられますね。そして母親というものは、すべての規律とか訓練とか、お勉強とか、権威とかの代表です。

だから母に対する憎しみが表面には出ず無意識のうちに蓄積されて青年期に達し、およそ母と同じ代名詞である政府、学校、学長、教授、警察、すべてこういう権威、規律、秩序、訓練、そういうものに対して猛然と反発するということはありうると思います。だから、母親が愛の代名詞でなくて、権威とか秩序とかの代名詞にすりかわったということになれば、そうして育つた子どもたちが大学生になって、とたんに火山が爆発するように蓄積された憎しみが、そこに燃えあがるということがありうるのではないかと思ひます。

やはり今後の幼児教育というものの中に、もう少し愛と憎しみの原理、建設と破壊、向上と堕落、生と死、などの基本的な願望が無意識の中でどう育っているか、という点を調べることが必要なのでしょうか。

つまり意識の面は、リズム遊びとか絵を描くという点でいろいろな指導の内容として重視されていることももちろん大事ですが、その前提にある無意識なものから、心情に定着するまでにはやくこの関係を再検討しなければなりません。そういう曲り角にわが国の教育全体が直面しているよう思います。ですから、大学教育の問題は実はさかのぼって、幼児教育の問題にまで波及してきている、と言つては言いすぎでしょうか。

いろいろ私の申し上げたいことは、言い落とした点もありましたけれど、以上のような問題提起です。（お茶の水女子大学）
(幼稚園教育実際指導研究会講演より)

さいごに